

第7回彗星会議に参加して

大石 英夫*

昨 1976 年は a から k まで合計 11 個の彗星が発見または検出されたが、残念乍ら日本人によるものは 1 星もなかった。永年の伝統を受け継いでいる筈の日本のコメットハンター達は一体どうして了ったのだろうか？

それはさておき、今年で第7回を迎えた彗星会議は六甲山脈中の箕谷グリーン・スポーツ・ホテル（神戸市北区）で3月26・27の両日、134名が参加して開催された。第4回（東京）と第6回（仙台）が研究発表主体、第5回（愛知県東栄町）が討論会形式（第1～3回は筆者は参加しなかった）で行われたのに対し、今回は研究発表、特別講演、分科会の3部形式に希望者参加の岡山天体物理観測所見学会付きという趣向であった。

第1部の研究発表は間に特別参加の東京天文台古在天体掃索部長および台湾の蔡章献氏の激励の言葉を挟んで計4件行われたが、蓮尾・吉武・坂本3氏は「眼視発見の彗星の発見事情およびその考察」と題し、過去の眼視発見時のデータの集計から推して、太陽離角(Elongation) 90°以上の空をもっと探すべきであると強調、植村氏は「West 彗星のダスト・テイル」と題し、近日点通過時より粒子放出が活発化し近年にない大彗星となった1975nのシンクロン・バンドの説明をコンピューターになる解析結果に基いて行い、中野氏は「多体問題の摂動計算」と題し、氏所有のYHP-9825(A)を用いて木星～冥王星の座標計算がプログラム化されたこと、更にこの結果を用いてCowellの方法による摂動計算により求めた小島彗星(1970 XII)の回帰予報を報告、最後に小関氏が「写真による等光度曲線の作成」と題して、サバチエ効果およびサンドイッチ法により彗星各部の等光度曲線が求められることを示された。

第2部の特別講演は夕食後、東京天文台の斉藤馨児氏が「彗星の物理」と題して彗星の形と本体、コマのスペクトル、コマの生成と消滅、核のモデルの各項について、今迄に判っていること、最近判ったこと、未だ良く判っていないこと、仮説や推論などを懇切丁寧に説明され、これに対する熱心な質疑応答が交わされた。

第1日の26日は第2部迄で、全員が会場となった同ホテルに宿泊したが、久しぶりに一堂に会した同好のメンバー達は、或はロビーで、或は宿泊室で、旧交を

暖め、歓談、彗星談義に午前2時、3時迄も花を咲かせた。

翌27日は「どうしたら彗星が見つかるか」、「どのような観測をしたらよいか」、「軌道計算」の3分科会に分れ、東京天文台の富田、斉藤、香西の3氏や、実質的に彗星会議の運営委員長である長谷川一郎氏を夫々囲んで、より具体的かつ突っ込んだ討議が進められた。そして午前11時閉会、来年度の宇都宮での再会を約して現地解散となった。

解散後、岡山行の希望者約45名は富田弘一郎氏引率によりバスと新幹線を乗り継いで新倉敷に向い、貸切バスを用意して案内役を買って出られた本田実氏に新倉敷駅頭で迎えられ、快晴の竹林寺山頂では石田観測所副所長の親切な説明を受けて時のたつのを忘れる程、極めて有意義な半日を過ごした。

来年度以降の彗星会議は、第8回1978年宇都宮、第9回1979年浜松、第10回1980年蒲郡、第11回1981年福岡まで開催地が決り、また、過去第1回～第7回に行われた研究発表や特別講演の集録も今年の秋までには発行されることとなった。

筆者は一彗星ファンとしてここ数回の彗星会議に参加し、戦争の影響で全く経験出来なかった修学旅行のような、或はミニ強化合宿のような雰囲気味わって来たが、彗星会議のように世界にも余り例を聞かない会合が、毎回100名を超す参加者を集めて定常的に開催され得るのは何故なのか？彗星のもつ神秘性、特異性、諸先達の築かれた伝統、アマとプロの巧みな連携プレー、運営委員の方々や地元の方々の献身的な努力、その他いろいろの方々からの精神的、物質的支援などなど、沢山の要因が挙げられようが、兎に角一口に云って熱気ムンムンと云った会合であることは確かである。毎回多数参加する中、高校生からオールドボーイまで、会期中に外国で、或は新彗星が発見されるのではないかと真剣に心配させられる位、日本中の彗星関係者が持場を離れて一堂に集って了う会合なのである。

今後、短期的にも長期的にもこのエネルギーが結実して成果の挙るよう、プロの方々も含めて、運営委員、開催地元の諸氏のリードをお願いしたいし、また、参加者もこの会合から何かを掴んで持場へ帰り、徒らにプロや他人の真似をするのではなく独創的な搜索、観測、軌道計算などにそのエネルギーを注ぎ込まねばなるまい。

* H. Oishi